

## 追悼

## Professor David Dollimore 博士の死を悼む



ESTACの創始者であり、ICTACの発展にも大きく貢献されたProf. D. Dollimore博士が突然の心臓発作で、2000年8月3日に73歳で永眠された。ここに慎んで哀悼の意を表したいと思う。D. Dollimore教授は1949年にExeter Universityを卒業された後、同大学で1952年にPh. D取得された。母校のExeter Universityで研究生生活を

始められ、1954年にSt. Andrew's Universityに移られた。そして、1956年にはSalfordのRoyal College of Advanced TechnologyにSenior Lectureとして迎えられ、多くの人材を育てられた。その後、1982年には英国から米国Ohio州のUniversity of ToledoにProfessor and Chairman of the Chemistry Department of College of Art and Scienceとして移られた。教授は、固体表面に関心をもたれ、関連する固体の熱的性質等の分野でも活躍された。教授の研究成果は、1975年にC. Jack Keatch博士と共著で出版された「Introduction to Thermogravimetry」や、1980年にAndrew Galwey博士、Michael Brown博士と著わされた名著Comprehensive Chemical Kinetics series Vol.22「Reactions in the Solid State」から伺い知ることができる。筆者もこの「Reactions in the Solid State」からは非常に多くのことを学ばせていただいた。

このような研究教育活動と同時に、学会における教授の活躍の足跡は枚挙にいとまない。

1969年より1971年にわたってThermal Methods Group of the Analytical Division of the Royal Society of ChemistryのChairmanを勤め、1976年にはAberdeenで第1回ESTACの開催を手がけられ、さらに1999年には

NATASのChairmanとして活躍されたことも記憶に新しい。教授の御活躍とお人柄については、ICTAC NEWS (1997, No. 2) に詳細な記載があるので関心のある読者は是非御一読載きたい。

筆者は、教授には直接お目にかかったことはなかったが、研究が取り持つ縁で色々と御指導戴いた。ここに教授とおつきあいの一端を紹介して、教授のお人柄を偲ぶよすがとしたい。1980年代の後半、私が論文を発表すると手元に別刷りが届く前に、教授から必ず別刷り請求の手紙を頂戴した。固相反応の分野では指導的な立場にあり、「Reactions in the Solid State」の著書のお一人でもあられた教授からの論文別刷り請求は、その後の研究を進める上で、大きな励ましとなったことを今しみじみと思い出す。また、筆者がJournal of Physical Chemistryに論文を投稿した際に、教授が拙著のRefreeを務められて貴重なコメントを編集者であるD. Herschbach教授を介して私の手元に届けて下さった。Refreeの名前は著者には伏せるのが原則であるにもかかわらず、編集者にご自身の名前を私に伝えて欲しい旨を申し出られ、御指導をいただいたことも懐かしい思い出である。非常に厳しいコメントとは対照的に、教授の心の温かさを伝える審査報告書が手元に残っている。

1994年にOhio州立大学のGallagher教授の下にお世話になった折に、一度教授をお訪ねしたいと思いつつも果たせなかったことが悔やまれる。また、Philadelphiaで開催された第11回ICTACでお会いしたいと思っていたが、教授が欠席されてこれも残念な結果となった。Copenhagenの第12回ICTACには出席されることを知り、今度はお会いできると期待していたところ、皮肉にもその会場で教授の悲報を知らされることになったことは、誠にもって残念なことであった。あらためて、教授のご冥福を心からお祈りしたい。合掌。

(新潟大学理学部 増田芳男)